



Title	小児期のいじめは、神経症傾向と仕事のストレスを介して、成人期のプレゼンティズムに影響を及ぼす [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	橋本, 省吾
Citation	北海道大学. 博士(医学) 乙第7205号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91913
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	HASHIMOTO_Shogo_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士 (医 学) 氏名 橋 本 省 吾

主査 教授 高 橋 誠
審査担当者 副査 准教授 倉 島 庸
副査 准教授 前 田 恵 理

学位論文題名

小児期のいじめは、神経症傾向と仕事のストレスを介して、
成人期のプレゼンティズムに影響を及ぼす
(Victimization in Childhood Influences Presenteeism in Adulthood via Mediation by
Neuroticism and Perceived Job Stressors)

この論文で、申請者は、443名の成人労働者ボランティアの質問紙調査データを用いて、小児期のいじめ経験とプレゼンティズム（従業員が職場に出勤はしているものの、何らかの健康問題によって業務の能率が落ちている状況）との関連性を、共分散構造分析により解析し、小児期のいじめ経験が、神経症傾向と仕事のストレスへの悪影響を介して、成人期のプレゼンティズムの危険因子となっていることを明らかにした、と述べた。

審査にあたり、まず副査の倉島准教授から、被験者のサンプルサイズについて質問があった。申請者は、本研究では、既存の質問紙調査データを利用し解析したため、サンプルサイズについて事前に検討は行っていないと回答した。倉島准教授から、小児期のいじめ経験から神経症傾向発症までの時間経過についての解析が行われているか質問があった。申請者は、小児期いじめ尺度による調査にはいじめを受けた時期の情報はなく、また神経症傾向（EPQ-R 短縮版）は調査時点でのデータであるため、いじめ経験から神経症傾向発症までの時間経過については検討できていないと回答した。倉島准教授から、本研究では小児期いじめ尺度の内容が重要と考えられるため、小児期いじめ尺度の質問票の質問項目を学位論文の方法の中に記載した方がよいとのコメントがあった。さらに倉島准教授から、小児期いじめ尺度とプレゼンティズム（WLQ 生産性損失）との相関関係の強さについて質問があった。申請者は、Pearson 相関係数は 0.12 であり弱い正の相関を認めたと回答した。

続いて副査の前田准教授から、被験者の募集方法、選択基準や謝金の有無等について質問があった。申請者は、本研究では、本研究計画を策定した大学病院の関係者から機縁法で被験者を募集し、謝礼としてプリペイドカードを提供したと回答した。前田准教授から、被験者の募集方法について学位論文には機縁法としか記載がないので、除外基準や謝礼等を含む詳細について学位論文の方法の中に追記した方がよいとのコメントがあった。前田准教授から、パス解析でのモデル適合度や、仮説以外のモデル（モデルに婚姻状態を入れたもの等）の検討の有無について質問があった。申請者は、モデル適合度は検討しており、非常に良好な適合度であったが、一方で解析対象は、仮説に基づき提案したモデルのみとなっていると回答した。前田准教授から、パス解析そのものの限界に関して、学位論文の考察の中で述べた方がよいとのコメントがあった。加えて、質問票以外の臨床情報等（精神疾患の既往、現在の精神疾患、家族の精神疾患、教育）の判断基準について、学位論文の方法の中に詳述した方がよいとのコメントがあった。

続いて主査の高橋教授から、本研究成果はどのように臨床現場や社会に還元されるのかとの質問があった。申請者は、ヘルスケアのマネジメントおよび職場の管理において、仕事のストレスモデルに、これまで明示されていなかった労働者の小児期のいじめ経験の有無とい

う新しい視点が提供され、プレゼンティズムの理解を助けるものになることが期待されると回答した。

本論文は、小児期のいじめ経験とプレゼンティズムとの関連性を初めて明らかにした価値ある研究である。その内容の一部は、学会発表として第52回日本神経精神薬理学会年会で口演され、基礎論文としてWeb of Science収録雑誌に掲載されている。また、申請者は、学位審査での発表および質疑応答を適切に行うとともに、審査員からのコメントに応じて、指摘された事項を審査後に適切に学位論文に反映させている。

審査員一同は、これらの成果を評価し、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。